里を想う

動物応用科学科3年　高橋 菜里

研究室に入室して早や半年、自然を愛し、野生動物によりよい環境をと考える仲間たちと出会え、ともに学べることを嬉しく思います。考え方もそれぞれで、私自身にとって良い刺激になっています。そのなかで、特に私と違う見方だと思ったのは、授業で「里山とは？」のディスカッションをした時です。「里山とは？」あがった意見は、お祖母ちゃんの家、癒される場所、日本の伝統的な生活を遺す場所、野生動物と都市との緩衝地帯など。

でも私にとっての里山とは帰る場所。高校までは、里山が私の生活場所でした。この違いはどうやら育った環境が都市であるか田舎であるかによるように思います。

野生動物学研究室に地方出身者がとても少ないのに驚きました。なぜ、田舎っぺよりも都会の人のほうが自然に興味を持つのでしょうか。都会の人は里山の自然に美しいもの、貴重なものを見いだしているのだと感じました。田舎っぺは、裏山に咲く花を「学術的に貴重」などとはあまり思いません。自然があるのは当たり前だから、とくに保全が必要だと気付かないのです。

私の故郷は、外房線の海を望む終点、安房鴨川です。お盆が近づくと、都会で就職した仲間もみんな帰ってきます。「飲みに行く」といっても選択肢は片手で足りるような町なので、どこの店でも即席同窓会です。違う場所で暮らしていても、変わらない自分の故郷があるというのが誇りです。変わらず迎えてくれるから、安心して出ていけるのだと思います。

しかし、不変だと思っていた故郷が、いつの間にか変わってしまうことがあります。写真は、高校時代、通学バスから見ていた景色です。湾岸埋め立てに使う土砂のために斜面が削られています。ここで遊んだ人は、削られて小さくなっていく山を見て、何を思うでしょうか。大好きな故郷は、自然があればこそ。里の山が消えれば、帰省しても「知らない地元」です。また田舎を求めて訪れた人にとっても、悲しい景色でしょう。山の所有者はそれに気づかなかったのでしょうか。あるいは知った上で、それでも売らなければならない事情があったのかもしれません。都会人が「自然は大切だから守るべき」と感じても、田舎では、生活のために自然を破壊しなければならない時もあるのです。

その意味で、リゾート開発は、地方振興のための、諸刃の剣です。お金は無いが自然はある。自然を「売り」にできれば、土産物屋のお婆ちゃんも暮らしていける。でもそのためには、交通整備や新しいホテルなどの施設が必要です。観光客が増えれば、ゴミも増えます。美しい自然をアピールするために、自然を壊さなければならないジレンマがあるのです。

次の写真は、私が今年の春休みに訪問した西表島の海岸です。高校生くらいの子 10 人程が、海岸清掃をしていました。前日まで一面にあった漂着ゴミが集められ、本来の美しい浜辺の姿を取り戻していました。「写真撮ってもいいですか？」　尋ねると、「是非！内地（本土）の人達に伝えて下さい」との返事でした。ここに紹介することで、約束を果たしたいと思います。

都会の人は、自然に憧れながらもその実態を知る人は少ないのですが、私は都会の人は田舎っぺよりも客観的に自然の価値を見ることができる良さがあると思います。田舎っぺにその価値に気づかせ、ジレンマ解消の糸口を提案するのは、外側にいる都会の人なのだと思います。

田舎っぺは、突然都会の人に「自然を守れ！」と言われても、相手にしないでしょう。互いに主張し合うだけで、聞く用意ができていなければ、話は平行線のままです。都会の人が自然保護活動をするなら、まず地元の人々の輪に入ってみてください。外側から見て自然に憧れた、次のステップは、内側と同じ視線で自然を見ることです。 両側の目を持てば、きっと最善の解決策が見えてくるはずです。

++